

# ハンガリーにおける総選挙（2018）と 欧州議会選挙（2019）

——政党システムの変化を中心に——

論  
説

萩野 晃

はじめに

ハンガリーにおける2018年4月の総選挙および2019年5月の欧州議会選挙は、政権与党である中道右派フィデス-ハンガリー市民連合（以下、フィデス）の圧勝に終わった。すでに2009年以降、フィデスは総選挙で国会の全議席の3分の2、欧州議会選挙でハンガリーに割り当てられた議席のうちの過半数の議席を維持してきた。

2018年の総選挙に関して、フィデスの圧勝に終わった選挙結果への分析がすでになされている。山野井茜は2014年以降の新しい選挙制度、フィデスの地方での動員力、まとまりを欠いた野党の動きに焦点をあててい<sup>(1)</sup>る。他方、柳原剛司は2010年代半ば以降のオルバーン政権の経済政策や社会政策に着目している。<sup>(2)</sup>

さらに、2010年以後のハンガリーの政党の状況に関して、フィデスの

---

(1) 山野井茜「ハンガリー総選挙の衝撃 —与党フィデス圧勝の要因と今後」『金融財政ビジネス』第10739号、2019年5月10日、16-19頁。

(2) 柳原剛司「ハンガリーにおける2018年国会議員選挙とオルバーン政権の経済政策」『松山大学論集』第30巻第4-1号、2018年10月、133-159頁。

一強といえる状態が継続する一方で、野党の側には断続的に変化が生じている。とくに、近年のヨーロッパ規模での人の移動や回復軌道に乗った経済の状況が、政党システムの変化と選挙の結果に影響をおよぼしていると筆者は認識する。

本稿の目的は、2010年代に生じたハンガリーの政党システムの変容と展望を考察することにある。分析に際して、2014年総選挙以降のハンガリー国内外の情勢を踏まえながら、2018年の総選挙、2019年の欧州議会選挙の投票結果に焦点をあてる。

第1章では、ハンガリー政治の転換点となった2010年のオルバーン（Orbán Viktor）政権成立以降の政党システムを、近年の研究動向を踏まえながら論じる。第2章で2018年の総選挙、第3章で2019年の欧州議会選挙の投票結果をそれぞれ分析する。とくに、フィデス、右派政党ヨビック「より良いハンガリーのための運動」、中道左派の社会党の動向を中心に論じる。最後に、2つの選挙の結果から見えてきた政党システムの変化と今後のハンガリー政治の展望について考察する。

## 1. 2010年以降のハンガリーの政党と政治

2010年4月の総選挙でフィデスが3分の2を越える議席を得て圧勝した結果、8年ぶりに首相に返り咲いたオルバーンの下で、新憲法（基本法）が制定されて行政府の権限が強化された。さらに、オルバーンは2011年のメディア法によって自身の政権に批判的なマスコミ報道への統制を強めた。オルバーン政権に対して、ヨーロッパ連合（EU）内部では激しい批判が起こった。EUからの批判にもかかわらず、オルバーン政権は制度上、民主主義でありながらも、十分な自由が保証されていない非リベラル・デモクラシー（illiberal democracy）ともいえる傾向を強めている。また、2010年の総選挙以降、ハンガリーでは排外主義的な主張を掲げる急進右

派のヨビックが議席を維持している。他方、2010年の総選挙で大敗した後、社会党をはじめとする左派・リベラル派は党勢を回復できず、反対に分裂状態に陥っている。以下、フィデス、ヨビック、社会党の動向を軸に2010年代のハンガリー政治の先行研究を概観する。

はじめに、2010年の第二期オルバーン政権成立後のハンガリー政治に関する先行研究の多くでは、オルバーンおよび与党フィデスの統治手法に否定的な見解が示されている。レンドヴァイ (Paul Lendvai) とデブレツェニ (Debreczeni József) はジャーナリストの視点から、行政府の権限強化にとどまらずオルバーン個人へと権力が集中している点を強調している。<sup>(3)</sup> 他方、フレディ (Frank Furedi) は、オルバーン政権と EU との関係に関して、価値と歴史観の相違をめぐる対立であると論じている。<sup>(4)</sup> バンクティ (Bánkuti Miklós) - ハルマイ (Halmai Gábor) - シェッペル (Kim Lane Scheppele) はフィデスの価値観を反映した2011年の基本法の制定に着目して、1989年の体制転換当時の憲法を否定したハンガリーの非リベラル・デモクラシーを分析している。<sup>(5)</sup> いずれにしても、オルバーンは後述するヨビックとも共通するポピュリズム的な手法で支持を集めたと指摘されている。

次に、ヨビックの先行研究において、ビーロー (Bíró Nagy András) -

---

(3) Paul Lendvai, *Hungary between Democracy and Authoritarianism* (London: Hurst & Company, 2010); Paul Lendvai, *Új honfoglalás* (Budapest: Noran Libro, 2016); Debreczeni József, *Az Orbán-rezsim 2010-20??* (Miskolc: De. Hukönyv, 2017).

(4) Frank Furedi, *Populism and the European Culture Wars* (London: Routledge, 2018).

(5) Miklós Bánkuti, Gábor Halmai, and Kim Lane Scheppele, 'Hungary's Illiberal Turn: Disabling the Constitution,' in Peter Krsztev and Jon Van Til, eds., *The Hungarian Patient: Social Opposition to an Illiberal Democracy* (Budapest: Central European University Press, 2015), pp. 37-46.

ローナ (Róna Dániel) は2010年代半ばまでのヨビックの主張として、EU 懐疑主義、反エリート主義、福祉排外主義を挙げている。<sup>(6)</sup> ヨビックの3つの主張には、西欧の急進右派(ポピュリスト)政党との共通点がみられる。また、コヴァーチ (Kovács András) もヨビックの西欧の急進右派政党と類似した若年齢の支持者層の存在を指摘している。<sup>(7)</sup> さらに、カラーチョニ (Karácsony Gergely) - ローナの研究では、ヨビックの支持者がフィデス、社会党の支持者と比較して、政治の情報をテレビからでなくインターネットから得る傾向が指摘されている。<sup>(8)</sup> ヨビック支持者の既存のメディア不信には、欧米諸国の若いポピュリスト支持者層との共通点がみられる。しかしながら、先行研究では言及されていないが、2014年以降のヨビックは急進的な右派層の票をめぐってフィデスと競合する中で、新たな方向性を模索している。

社会党に関して、レンドヴァイは2006年以降の首相ジュルチャーニ (Gyurcsányi Ferenc) の失言に端を発した政治的混乱やリーマンショックの影響を受けた経済危機に対処できなかった末に2010年の総選挙の大敗に至った状況を「左翼の自殺」<sup>(9)</sup>と述べている。また、2010年の総選挙で

---

(6) Bíró Nagy András-Róna Dániel, Tudatos radikalizmus: A Jobbik útja a parlamentbe, 2003-2010. In. Szerkesztette: Láncki András. *Nemzet és radikalizmus: Egy új pártcsalád felemelkedése* (Budapest: Századvég, 2011), 242-283. o.

(7) András Kovács, 'The Post-Communist Extreme Right: The Jobbik Party in Hungary' in Ruth Wodak, Majid Khosravi-Nik, and Brigitte Mral, eds., *Right-Wing Populism in Europe* (London: Bloomsbury, 2013), pp. 223-233.

(8) Karácsonyi Gergely-Róna Dániel, "A Jobbik titka: A szélsőjobb magyarországi megerősödésének lehetséges okairól," *Politikatudományi Szemle*, 19, 1, 2010, 49-50. o.

(9) Paul Lendvai, *Hungary between Democracy and Authoritarianism*, pp. 195-205.

の大敗後の社会党について、1989年に党名を変更した後、最初に実施された1990年の総選挙での大敗に続く二度目の後継政党への変容であるとラクネル (Lakner Zoltán) は述べている。<sup>(10)</sup> ラクネルの分析にもとづけば、体制転換から20年を経て衰退した社会党は、もはや中道左派の国民政党ではなくなった。実際に、2010年の下野の後、社会党はジュルチャーニをはじめとする有力者の離党があいつぎ、組織の弱体化が進行している。さらに、2010年以降に国会に議席を有する環境保護政党「政治のもう一つの可能性」も含めた左派・リベラル派の分裂状態が、フィデスにとって有利にはたらいっている。

先行研究で示された成果を踏まえつつ、2010年以降のハンガリー国内政治から2018年の総選挙、2019年の欧州議会選挙を分析する際、フィデス、ヨビックと西欧ポピュリスト政党との比較、西欧におけるポピュリズムの台頭による社会民主主義政党の衰退とハンガリー社会党の衰退との比較、2014年以降の政治状況としてのヨーロッパ規模での難民問題のハンガリーへの影響とフィデスの経済政策の3点からの分析が必要であると筆者は認識する。具体的には、①フィデスは西欧にみられるようなポピュリスト政党なのか、②ハンガリーでもヨビックが社会党の支持層を侵食したのか、③2014年以降の政治状況（難民問題、経済政策）が2018年の総選挙、2019年の欧州議会選挙の結果にどのように反映されたのかを論じる。

以下の章では、2018年と2019年の選挙の結果を通して、上記の①～③の問題提起について論じる。

---

(10) Lakner Zoltán, *Utak és útvesztők: Az MSZP húsz éve* (Budapest: Napvilág Kiadó, 2011).

## 2. 2018年総選挙

ハンガリーにおける総選挙(二〇一八)と欧州議会選挙(二〇一九)

最初に、欧州難民危機が発生した2015年から2018年総選挙に至るまでのハンガリーの政治状況について述べる。2015年の春以降、南部国境から大量の難民がハンガリーに入国した。まもなく、オルバーン政権は不法入国を阻止するため高さ4メートルのフェンスをセルビアとの国境175キロにわたって設置した。2015年の秋には、ハンガリー政府が南部国境の閉鎖に踏み切った。その後も、オルバーン政権は国境管理を強化した。

2015年5月にEUの政策執行機関である欧州委員会は難民対策の指針として「人口移動に関するヨーロッパのアジェンダ」を発表し、EUは加盟国に人口や経済規模に応じて一定の難民の受け入れ分担を求めた。EU加盟国が受け入れる難民の合計は16万人だった。EUの難民の受け入れ割り当てに激しく反発したハンガリー政府は、2015年12月2日にスロヴァキア政府とともに欧州司法裁判所に無効を求める訴えを起こした。その後、難民の受け入れ割り当ての履行を求めるEU、受け入れ割り当てに反対するオルバーン政権双方の対立が表面化した。2017年9月6日、欧州司法裁判所がEUによる加盟国への難民の受け入れ割り当てを不当だとするハンガリー、スロヴァキアの訴えを退けた。<sup>(11)</sup>

欧州司法裁判所の判決後、欧州議会では難民の受け入れ割り当ての履行を促すため、拒否する加盟国に罰則を科すことが審議された。

オルバーンは難民の受け入れ問題を約半年後に迫った総選挙の主要な争

---

(11) 2017年9月7日付『フィナンシャル・タイムズ』(電子版), *ft.com*, September 7, 2017, <https://www.ft.com/content/9116ebbc-92de-11e7-bdfa-eda243196c2c> (2017年9月7日にアクセス) オルバーン政権の欧州難民危機への対応は、拙稿「オルバーン政権と欧州難民危機(2015-2017)」『法と政治』(関西学院大学法政学会), 第68巻第4号, 2018年2月, 49-70頁を参照。

点にしようと試みた。メディアを掌握していたオルバーン政権は、10月9日以降にハンガリー生まれのアメリカ人投資家ソロス（George Soros）が大量の難民のヨーロッパでの定住を計画していると有権者に訴えた。ソロスは自身の財団オープン・ソサイエティを通じて難民を支援して、オルバーン政権を激しく批判していた。『マジナル・ヒールラップ』や『マジナル・ネムゼット』などの全国紙（電子版）には、ソロスの顔写真に「ソロス計画について声を挙げねば！」と書かれた広告が掲載された。フィデスがユダヤ系の出自であるソロスを持ち出して難民の受け入れ反対のアピールをすることには、従来のヨビックのポピュリズムとの共通点がある。かつて、ヨビックの国会議員の中にはユダヤ人の脅威を煽るような発言をする者もいた。

2018年に入ると、ハンガリー国内では4月8日の投票へ向けた選挙戦が事実上、始まった。2月には、ハンガリー政府が「ストップ・ソロス」と称するキャンペーンを開始した。国内のいたるところに「ストップ・ソロス」というステッカーの貼られた広告がみられた。広告には「ソロスがアフリカや中東から何百万もの難民を定住させる」と書かれていた。

総選挙が一月あまり後に迫った2月25日、前哨戦ともいえる南東部の都市ホードメゼーヴァーシャーレの市長選挙が行われた。選挙の結果は、予想を覆して野党が共同で擁立した無所属の候補ザールキーザイ（Zárki-Zay Péter）がフィデスの候補に勝利した。ホードメゼーヴァーシャーレはフィデスの地盤の地方都市であり、首相府長官ラーザール（Lázár János）の地元だった。野党支持者を含めたフィデスに批判的な有権者にとって、少なからず総選挙への期待が高まった。オルバーン政権に批判的な欧米メディアも、地方都市の首長選挙にもかかわらず、総選挙を前に政治の潮目が変わる期待を込めて大きく取りあげていた。<sup>(12)</sup>

投票日が近づくと、フィデスは野党を「移民（難民）の党」、野党の候

補者を「ソロスの候補者」と呼び、メディアを通じて有権者に「ハンガリーを移民の国にするな!」と訴えた。その一方で、野党の支持者の多くも難民受け入れに否定的であった。そのため、野党は難民問題でフィデスに有効な反論ができなかった。

さらに、ハンガリー政府は新聞(電子版)の広告で、国連が難民の受け入れを要求していることを取りあげて、難民流入への危機感を煽った。投票直前の数日間、全国紙『マジャル・ヒーラップ』(電子版)に掲載された広告の動画では、難民の受け入れについて「決めるのはハンガリーだ、国連ではない!」というメッセージが発せられた。

次に、2014年の総選挙以降のハンガリーの経済状況を概観する。リーマンショック後の2009年に前年のGDP比で6.6%のマイナス成長となったハンガリーでは、その後も経済の回復が遅れた。2010年に政権に返り咲いたオルバーンは財政健全化を迫るEUに反発しながらも財政再建を進めた。2013年にハンガリーは過剰債務手続き国の認定を解除された。また、2016年にハンガリーはリーマンショック後にEU、国際通貨基金から受けた緊急融資を完済した。2014年以降、ハンガリー経済はEUからの公共投資に支えられながら、4%前後のGDP成長率を維持している。

さらに、柳原が論じたように、2014年以降にオルバーン政権は「就労にもとづく国家」を掲げて、地方都市におけるパブリック・ワークなどを推進している。<sup>(13)</sup>失業するよりも低賃金ながら単純労働に従事することで自

(12) 2018年2月26日付『ニューヨーク・タイムズ』(電子版), *nytimes.com*, February 26, 2018, <https://www.nytimes.com/2018/02/26/world/europe/hungary-viktor-orban-opposition.html> (2018年2月28日にアクセス); 2018年2月26日付『ロイター通信』(電子版), *reuters.com*, February 26, 2018, <https://www.reuters.com/article/us-hungary-election/hungary-pms-fidesz-party-suffers-surprise-setback-at-local-by-election-idUSKCN1G90X5> (2018年2月28日にアクセス)



立した社会の構成員として認識されることを、オルバーンは地方の有権者に奨励している。

以下の表1～7は、2018年総選挙の分析のために、ハンガリー全国選挙事務所のHP (<http://www.valasztas.hu>) のデータをもとに筆者が作成した。

表1 2018年総選挙全国リスト（比例区）

政党	得票率%（議席数）
フィデス - キリスト教民主人民党	49.27%（42）
ヨビック	19.06%（25）
社会党 - 対話	11.91%（12）
政治のもう一つの可能性	7.06%（7）
民主連合	5.38%（6）

表2 2014年総選挙全国リスト（比例区）

政党	得票率（議席数）
フィデス - キリスト教民主人民党	44.87%（37）
社会党 - 共に - 民主連合 - 対話 - リベラル党	25.57%（28）
ヨビック	20.22%（23）
政治のもう一つの可能性	5.34%（5）

表3 2018年総選挙の小選挙区（首都、県）での各党の獲得議席数

首都・県	Fidesz-KDNP 計91	MSZP-P 計8	Jobbik 計1	DK 計3	LMP 計1	E 計1	Független 計1
ブダペスト	6	7		3	1	1	

(13) 柳原，前掲書，149-150頁。

B-K	6						
バラニャ	4						1
ベーケーシュ	4						
B-A-Z	7						
チョングラード	3	1					
フェイエール	4		1				
Gy-M-S	5						
ハイドウ - ビハル	6						
ヘヴェシュ	3						
J-N-Sz	4						
K-E	3						
ノーグラード	2						
ペシュト	12						
ショモジ	4						
Sz-Sz-B	6						
トルナ	3						
ヴァシュ	3						
ヴェスプレーム	4						
ザラ	3						

以下は、略記した政党名。Fidesz-KDNP: フィデス - キリスト教民主人民党, Jobbik: ヨビック, MSZP-P: 社会党 - 対話, LMP: 政治のもう一つの可能性, DK: 民主連合, E: 共に, Független: 無所属

以下は、略記した県名。B-K: バーチ - キシュクン, B-A-Z: ボルショド - アパウーイ - ゼムプレーン, Gy-M-S: ジェール - モション - ショブロン, J-N-Sz: ヤース - ナジクン - ツルノク, K-E: コマーロム - エステルゴム, Sz-Sz-B: サボルチ - サトマー - ベレグ

表4 2014年総選挙の小選挙区（首都、県）での各党の獲得議席数

首都・県	FIDESZ-KDNP 計96	Sz-E-D-P-L 計10
ブダペスト	10	8
B-K	4	
バラニャ	6	
ベーケーシュ	4	
B-A-Z	6	1
チョングラード	3	1

フエイエール	5	
Gy-M-S	5	
H-B	6	
ヘヴェシュ	3	
J-N-Sz	4	
K-E	3	
ノーグラード	2	
ペシュト	12	
ショモジ	4	
Sz-Sz-B	6	
トルナ	3	
ヴェシュ	3	
ヴェスプレーム	4	
ザラ	3	

Sz-E-D-P-L: 社会党 - 共に - 民主連合 - 対話 - リベラル党

表5 2018年総選挙の小選挙区（首都）の1, 2, 3位

	1位の政候補者の党 得票率 (%)	2位の政候補者の党 得票率 (%)	3位の政候補者の党 得票率 (%)
ブダベスト V	LMP 48.73	Fidesz-KDNP 41.81	Jobbik 6.39
XI	Fidesz-KDNP 42.16	DK 40.53	LMP 6.1
XII	Fidesz-KDNP 42.71	DK 39.03	LMP 6.98
II	Fidesz-KDNP 41.83	DK 37.14	LMP 10.01
VII	DK 45.85	Fidesz-KDNP 37.14	Jobbik 7.06
VIII	Fidesz-KDNP 40.51	DK 32.17	Jobbik 12.92
XIII	MSZP-P 56.48	Fidesz-KDNP 28.49	Jobbik 6.07
XIV	MSZP-P 47.23	Fidesz-KDNP 35.06	Jobbik 7.65

X	MSZP-P 40.78	Fidesz-KDNP 39.32	Jobbik 10.07
III	MSZP-P 48.15	Fidesz-KDNP 36.36	Jobbik 10.82
IV	DK 40.8	Fidesz-KDNP 35.26	Jobbik 10.23
XV	DK 42.25	Fidesz-KDNP 37.54	Jobbik 10.27
XVI	Fidesz-KDNP 41.91	Együtt 39.96	Jobbik 9.14
XVII	Fidesz-KDNP 41.17	MSZP-P 37.23	Jobbik 13.04
XVIII	MSZP-P 46.3	Fidesz-KDNP 39.7	Jobbik 11.61
XX	MSZP-P 43.23	Fidesz-KDNP 37.28	Jobbik 12.21
XXI	Együtt 42.45	Fidesz-KDNP 37.09	Jobbik 15.58
XXII	MSZP-P 41.45	Fidesz-KDNP 40.06	Jobbik 9.17

表6 2014年、2018年総選挙でヨビックが2位に入った選挙区(県別)の数

県 ( )内は選挙区数	2014年総選挙の2位の選挙区数 ( )内は県庁所在地	2018年総選挙の2位の選挙区数 ( )内は県庁所在地
Baranya (4)	0 (0)	2 (1)
B-K (6)	4 (1)	6 (2)
ベークーシュ (4)	1 (0)	4 (1)
B-A-Z (7)	5 (0)	6 (1)
チョングラード (4)	2 (0)	2 (0)
フェイエール <sup>1</sup> (5)	2 (1)	3 (1)
Gy-M-S (5)	1 (0)	4 (1)
H-B (6)	4 (1)	5 (2)
ヘヴェシュ (3)	3 (1)	3 (1)
J-N-Sz (4)	3 (0)	4 (1)
K-E (3)	0 (0)	2 (0)
ノーグラード (2)	1 (1)	1 (1)

ベシュト (12)	3	6
ショモジ (4)	2 (0)	3 (1)
Sz-Sz-B (6)	5 (1)	5 (1)
トルナ (3)	1 (0)	2 (0)
ヴァシュ (3)	1 (0)	2 (0)
ヴェスプレーム (4)	1 (0)	3 (0)
ザラ (3)	2 (0)	3 (1)

ベシュト県の県庁所在地は首都ブダペストなので除外。

1 2018年にドゥナウーイヴァーロシュでヨビックの候補が当選。

表7 2014年、2018年総選挙で社会党および選挙連合が  
2位に入った選挙区（県別）の数

県（ ）内は選挙区数	2014年総選挙の2位の選挙区 数（ ）内は県庁所在地	2018年総選挙の2位の選挙区 数（ ）内は県庁所在地
バラニャ (4)	4 (2)	1 (0)
B-K (6)	2 (1)	0 (0)
ベーケーシュ (4)	3 (1)	0 (0)
B-A-Z <sup>1</sup> (7)	1 (1)	1 (1)
チョングラード <sup>2</sup> (4)	1 (1)	1 (1)
フェイエール (5)	3 (1)	0 (0)
Gy-M-S (5)	4 (2)	0 (0)
H-B (6)	2 (2)	1 (1)
ヘヴェシュ (3)	0 (0)	0 (0)
J-N-Sz (4)	1 (1)	0 (0)
K-E (3)	3 (1)	1 (1)
ノーグラード (2)	1 (0)	0 (0)
ベシュト (12)	9	2
ショモジ (4)	2 (1)	1 (0)
Sz-Sz-B (6)	1 (1)	1 (1)
トルナ (3)	2 (1)	0 (0)
ヴァシュ (3)	2 (1)	1 (1)
ヴェスプレーム (4)	3 (1)	0 (0)
ザラ (3)	1 (1)	0 (0)

2014年総選挙は社会党-共に-民主連合-対話-リベラル党による5党の選挙連合。  
2018年総選挙で、社会党-対話との候補者調整の結果、フェイエール、Gy-M-S 県で各1名、ペシュト県で2名の民主連合の候補が2位になった。  
ペシュト県の県庁所在地は首都ブダペストなので除外。  
<sup>1</sup> 2014年に県庁所在地ミシュコルツで5党の選挙連合の候補1名が当選。  
<sup>2</sup> 2014年に県庁所在地セゲドで5党の選挙連合の候補、2018年に社会党-対話の候補1名が当選。

2018年4月の総選挙で、フィデスは2006年から選挙連合を組むキリスト教民主人民党と合わせて3分の2の133議席を得た(表1, 表3)。国会の全議席に占める割合は66.83%である。フィデスは全国リスト(比例代表)92議席のうち49.27%の得票率で42議席(表1)、全国106の小選挙区で91議席(表3)を獲得した。ヨピックは全国リストで、前回20.22%よりわずかながら少ない19.06%の得票率だったにもかかわらず、獲得した議席数は23から25に増加した(表1, 表2)。理由は、小選挙区での当選者の余剰票、落選者の死票が全国リストで有権者の投じた票に合算される制度のためである。また、ヨピックは2018年の総選挙で初めて小選挙区で1議席(表3)を得て計26議席となった。社会党は「対話」との連合で総選挙を戦った。社会党は左派・リベラル派の5党による選挙連合「団結」でのぞんだ前回2014年と比べても、全国リストで2014年の25.57%の28議席(表2)から11.91%の12議席(表1)へ大きく後退した。社会党-「対話」は全国リスト12に加え、小選挙区で8議席(表3)の計20議席だった。2014年には「団結」に加わったジュルチャーニの民主連合は、全国リスト5.38%で6議席(表1)、小選挙区で3議席(表3)の計9議席だった。「政治のもう一つの可能性」は前回より3議席増の小選挙区で1(表3)、全国リスト7(表1)の計8議席だった。

以下、フィデス、ヨピック、社会党の選挙結果を個別に分析する。

#### フィデス

フィデスの議席は2014年の総選挙(表2, 表4)と同じ133であるが、  
14(882) 法と政治 70巻3号 (2019年11月)

前回2014年とは異なる特徴がみられた。フィデスは小選挙区での議席を前回よりも5減らした(表3, 表4)。だが、フィデスは地方で圧倒的な優位を示した。実際、当選者91名の小選挙区のうち47選挙区で50%を超える得票率であった<sup>(14)</sup>。とくに、フィデスが優位に立った地域は首都ブダペストを中心とした同心円で周辺に位置する県であり、さらに県庁所在地以外の小都市、農村部の選挙区であった。

2010年までの選挙制度での小選挙区は2回投票制であり、1回目で過半数を得た候補がない場合、上位3名で2回目の投票が行われていた。2014年の総選挙からは、小選挙区で1位となった候補が当選することになった。2018年総選挙での半数以上のフィデスの小選挙区当選者が、2010年以前の選挙制度であっても決選投票を経ずに当選できた。2014年にフィデスが議席を獲得した96の小選挙区で、50%を超える得票率は19選挙区だけだった<sup>(15)</sup>。

しかし、その一方で、フィデスは首都ブダペストで退潮傾向にある。フィデスは2014年の総選挙でブダペストの小選挙区18のうち10選挙区で議席を獲得(表4)していたが、2018年の総選挙では6選挙区(表3)にとどまった。山野井が指摘したように、首都のすべての選挙区でフィデス候補者の得票率は5割未満であり、決選投票のない勝者総取りの仕組みが、首都ではフィデスの有利に働いた<sup>(16)</sup>。

表5のブダペストの小選挙区での投票結果を参照しながら考えてみよう。

---

(14) 2018年総選挙の小選挙区の詳細なデータは、ハンガリー全国選挙事務所のHP, <https://www.valasztas.hu/egyeni-valasztokerulet-eredmenye> を参照。(2018年10月5日にアクセス)

(15) 2014年総選挙の小選挙区の詳細なデータは、ハンガリー全国選挙事務所のHP, <https://static.valasztas.hu/dyn/pv14/szavossz/hu/oevker.html> を参照。(2018年10月5日にアクセス)

(16) 山野井, 前掲書, 18頁。

社会党、民主連合、「政治のもう一つの可能性」の間で、候補者調整、選挙協力が実現していれば、フィデスは首都でさらに議席を減らしていただろう。具体的には、民主連合が XI 区、XII 区、II 区で勝利した可能性がある。さらに、左派・リベラル派と穏健化したヨビックとの間での候補者調整が行われていれば、VIII 区、XVI 区、XVIII 区でフィデスの候補者の当選を阻むことができたと考えられる。少なくとも、野党はフィデスの国会での 3 分の 2 の議席の獲得を阻止できたはずである。

さらに、2018年の総選挙の投票率は69.73%（2014年は61.73%）で、体制転換以降の自由な総選挙の中では2002年の70.52%に次ぐ高さとなった。フィデスと社会党が激しく競りあった2002年の総選挙では、有権者の関心が非常に高かった。他方、2018年の総選挙では、事前の各種世論調査で過去2回（2010年、2014年）と同様にフィデスの優位は揺らいでいなかった。投票に足を運んだ有権者の増加から、政府与党による EU の難民受け入れ割り当ての拒否、不法移民阻止のキャンペーンが良くも悪くも選挙への関心を高めたことは間違いない。ナショナリスティックなキャンペーンは首都では不人気だったが、地方では一定の効果をあげたと考えられる。第1章での問題提起①の答えとして、フィデスの西欧ポピュリストに類似した反難民ポピュリズムの手法は、後述する穏健化したヨビックの従来の支持基盤であった地方の急進右派層に食い込むことで3分の2の議席を確保につながった。

フィデスが地方で圧倒的な優位に立った要因として、柳原が指摘したパブリック・ワークなどオルバーン政権の社会政策が有権者の支持を得たことも挙げられる。パブリック・ワーク従事者の比率の高い東北部、南東部、南西部の県とフィデスの得票率が高かった小都市、農村部の小選挙区とが一致していた。<sup>(17)</sup> 第1章での問題提起③の答えとして、2014年以降、フィデスは不法移民の脅威のアピールのみならず、堅実な社会政策により地方

16(884) 法と政治 70巻3号 (2019年11月)



での支持を拡大した。

### ヨビック

2018年の総選挙でヨビックは地方で左派・リベラル派の支持層に食い込むことに成功した。表6、表7にみられるように、2018年総選挙においてヨビックが2位に食い込んだ地方の選挙区は、前回2014年と異なり、社会党を上回った。カラーチヨニイ-ローナが指摘したように、2010年以降、ヨビックは高学歴で経済的に余裕のある人々からも支持された<sup>(18)</sup>。ヨビックは反ユダヤ主義やロマの排斥に賛同するコアな支持者ばかりでなく、左派・リベラル派による政権の下での西欧化に幻滅した若く高学歴の有権者から支持を得るのに成功した。

しかしながら、第1章の問題提起②の西欧にみられる右派のポピュリスト政党による社会民主主義政党支持層への侵食とは異なる側面も存在したと筆者は捉える。単純に、社会党が従来の基盤としてきた産業の合理化やグローバル化で活気を失った地域においてヨビックが支持を伸ばしたわけではなかった。2014年の総選挙以降の4年間にヨビックは政策転換を進めていた。党首ヴォナ (Vona Gábor) をはじめとする党指導部はヨビックの急進右派から右派の国民政党への脱却をはかった。党幹部による2014年の総選挙以前のロマやユダヤ系などハンガリー国内のマイノリティへの激しい敵対姿勢は影を潜め、ヨビックは穏健な路線へと移行しつつあった。ヨビックにとって、穏健化は中道への支持拡大が期待できる反面、急進右派からの支持を失うリスクを伴っていた。

---

(17) 柳原，前掲書，152-154頁を参照。

(18) Karácsonyi Gergely-Róna Dániel, i.m., 42. o. なお，2014年段階でのヨビックの主張に関しては，拙稿「中・東欧における極右政党の台頭 ―ハンガリーのヨビックの事例から」『法と政治』（関西学院大学法政学会），第65号第3号，2014年11月，725-750頁を参照。

表6にみられるように、2014年の総選挙と比較すれば、ヨビックはむしろフィデスの地盤であるヴァシュ県、ザラ県、ヴェスプレーム県、ジェール-モション-ショプロン県、バラニャ県など地理的に西欧に近い西部のトランスダニューブ地域で支持を伸ばした。穏健化を進めるヨビックの路線が、西欧に近い地域で一定の成果をあげたことがうかがえる。とくに、ヨビックは西部のフェイエール県の小選挙区で1議席を得た(表3)。

### 社会党

ヨビックと対照的に、表7にみられるように、2018年の総選挙の結果、社会党は2014年の総選挙と比較しても、地方での退潮がより明確となった。とくに、社会党の衰退は比較的人口の多い県庁所在地の選挙区で顕著であった。すでに、2010年の総選挙以降、フィデスが社会党の伝統的な東北部の支持基盤を侵食していた。社会党とフィデスが激しく競り合った2002年、2006年の総選挙で、当時の選挙制度による県別の地域リスト(比例区)において社会党がともに勝利したのは、首都ブダペスト、バラニャ県、ベーケーシュ県、ボルショド-アバウーイ-ゼムプレーン県、ヘヴェシュ県、ヤース-ナジクン-ソルノク県、コマーロム-エステルゴム県、ノグラード県であった。<sup>(19)</sup> そのうち、ブダペスト、バラニャ県、コマーロム-エステルゴム県以外は、西欧に近いトランスダニューブ地域より失業率の高い東部に位置する県だった。2010年の下野以前、社会党および連立パートナーであった自由民主連合は、国民生活を直撃する緊縮政策を実施して、有権者の反発を招いていた。2014年の総選挙でも、社会党はハンガリーのラストベルトともいえる北東部のボルショド-ア

(19) 2002年、2006年の総選挙の比例区における県別の第一党は、ハンガリー全国選挙事務所のHP、[https://static.valasztas.hu/parval2002/so02/ered\\_ind.htm](https://static.valasztas.hu/parval2002/so02/ered_ind.htm) [https://static.valasztas.hu/parval2006/hu/09/9\\_0.htm](https://static.valasztas.hu/parval2006/hu/09/9_0.htm) を参照。(2018年10月5日にアクセス)

バウイー-ゼムプレーム県，ヘヴェシュ県，サボルチ-サトマル-ベレグ県で退潮していた。さらに，2018年には西部のトランスダニューブ地域でも社会党の衰退が著しかった。

にもかかわらず，2018年に社会党が議席を得た小選挙区はブダペスト7，チョングラード県1の8議席（表3）であった。さらに，2014年に社会党と選挙連合を組んでいた民主連合が3議席，「共に」が1議席を，それぞれブダペストの小選挙区で得ていた（表3）。前回の2014年には左派・リベラル派の選挙連合が小選挙区で得た議席は10（ブダペスト8，地方2）であった（表4）。社会党は首都での善戦にかかわりなく，フィデス，ヨビックに地方での票田を侵食されて，凋落に歯止めがかからない状態にある。

### 3. 2019年欧州議会選挙

2018年の総選挙で勝利したフィデスは，ソロスの支援する NGO の国内での活動を妨害するためのストップ・ソロス法を新たに招集された国会に提出して，6月20日に成立させた<sup>(20)</sup>。同法によって，不法移民への支援を行った個人，団体関係者に1年以下の禁固刑を科すことが可能となった。

ストップ・ソロス法について，人権や法の支配の観点から国連難民高等弁務官事務所，欧州評議会ヴェニス委員会が問題視している。さらに，欧州議会の市民の自由・司法・内務委員会（LIBE）でも，ストップ・ソロス法への批判が強まっていた。とくに，オランダから選出の環境保護派の

---

(20) 2018年6月20日付ハンガリーの全国紙『マジダル・ヒーラップ』（電子版），*Magyar Hírlap. hu*, 2018. június 20, [http://magyarhirlap.hu/cikk/121254/Elfogadta\\_az\\_Orszaggyules\\_az\\_alaptorveny\\_hetedik\\_modositasat\\_es\\_a\\_Stop\\_Sorost](http://magyarhirlap.hu/cikk/121254/Elfogadta_az_Orszaggyules_az_alaptorveny_hetedik_modositasat_es_a_Stop_Sorost) (2018年6月21日にアクセス) 法律の内容は，以下を参照。<https://mkogy.jogtar.hu/jogszabaly?docid=A1800006.TV> (2018年6月24日にアクセス)

欧州議会議員サルゲンティーニ（Judith Sargentini）はハンガリーの難民政策に批判的であった。サルゲンティーニはハンガリーの総選挙からまもない4月11日に報告書を作成した<sup>(21)</sup>。その後、同報告書はストップ・ソロス法の成立直後に欧州議会に提出された。9月に入って欧州議会においてサルゲンティーニ報告で示されたEU条約2条に挙げられる価値へのハンガリーによる重大な侵害が存在するか否かの審議が始まった。採決の前日の9月11日、オルバーンは欧州議会において、同報告に賛成票を投じる多数派はハンガリー政府でなく、ハンガリーの国や人々を批判することになると述べた。さらに、演説の中で、オルバーンはサルゲンティーニ報告について、ハンガリーに調査団を送ったこともなく事実関係の検証などなされていないと反論した<sup>(22)</sup>。

9月12日に欧州議会は3分の2をはるかに越える賛成多数で、サルゲンティーニ報告にもとづくハンガリーでのEU条約2条への重大な侵害の存在について決議した。決議に必要な賛成票376のところ、実際の賛成が448（反対197、棄権48）<sup>(23)</sup>だった。賛成票を投じた議員の中には、フィデスが欧州議会で所属する欧州人民党（EPP）の議員115名も含まれていた。EEP内部では、フィデスの会派の資格停止も検討された。欧州議会

---

(21) サルゲンティーニ報告は、以下を参照。<http://www.europarl.europa.eu/resources/library/media/20180411RES01553/20180411RES01553.pdf>（2018年6月27日にアクセス）

(22) オルバーンの欧州議会でのスピーチは、以下のハンガリー政府のHPを参照。<http://www.kormany.hu/en/the-prime-minister/the-prime-minister-speeches/address-by-prime-minister-viktor-orban-in-the-debate-on-the-so-called-sargentini-report>（2018年9月13日にアクセス）

(23) 2018年9月12日付『マジナル・ヒールラップ』（電子版）、*Magyar Hírlap*. hu, 2018. szeptember 12, [http://magyarhirlap.hu/cikk/128297/Megszavazta\\_az\\_EP\\_a\\_magyar\\_jogallamisagi\\_helyzetrol\\_szolo\\_Sargentinijelentest](http://magyarhirlap.hu/cikk/128297/Megszavazta_az_EP_a_magyar_jogallamisagi_helyzetrol_szolo_Sargentinijelentest)（2018年9月13日にアクセス）

選挙が近づくとつれて、フィデスは欧州委員会、EPP への批判を強めていった。政府の EU の難民対策に反対するキャンペーンでは、依然としてソロスが利用されていたが、欧州委員長ユンケル（Jean-Claude Juncker）も批判の対象となった。

欧州議会選挙まで半年をきった2018年12月、オルバーン政権は残業時間の年間の上限を250時間から400時間まで引き上げる、残業手当の支払いを最長3年間先送りできる労働法改正案を可決させた。労働法の改正に対して、国内では「奴隷法」であるとの反発の声が一部から挙がった。労働法の改正反対をめぐるデモは、同じ時期にフランスで激しさを増していた黄色いベスト運動に触発された抗議行動であった。労働組合、社会党や民主連合などの左派・リベラル派の野党のみならず、ヨビック、「政治のもう一つの可能性」までが街頭で激しい抗議を繰り広げた。しかしながら、街頭での抗議行動は野党の支持の拡大にはつながらなかった。

選挙戦が本格化すると、オルバーンは4月6日に不法移民（難民）に関する7点のプログラムを発表した。同プログラムには不法移民の扱いに関して加盟国政府が EU 官僚から権限を取り戻すこと、移民カードやヴィザの停止、移民への支援よりも国境管理への予算の配分などが記されていた。<sup>(24)</sup>

以下の表8～10は、2019年欧州議会選挙の分析のために、ハンガリー全国選挙事務所の HP (<http://www.valasztas.hu>) のデータをもとに筆者が作成した。

---

(24) 2019年4月5日付『マジャル・ヒールラップ』（電子版）、*Magyar Hírlap. hu*, 2019. április 5, <https://www.magyarhirlap.hu/belfold/20190405-a-fidesz-het-pontja-europaert>（2019年4月6日にアクセス）

表8 2019年欧州議会選挙

	議席数 (前回2014年)	得票率% (前回2014年)
フィデス-キリスト教民主人民党	13 (12)	52.56 (51.48)
民主連合	4 (2)	16.05 (9.75)
モメントゥム	2 (0)	9.33
社会党 <sup>1</sup>	1 (2)	6.61 (10.9)
ヨビック	1 (3)	6.34 (14.67)
わが祖国	0	3.29
共に-対話	0 (1)	(7.25)
政治のもう一つの可能性	0 (1)	2.18 (5.04)

<sup>1</sup> 2019年は社会党-対話の選挙連合

表9 欧州議会選挙 (2019) 首都, 県別の得票率 (%)

	Fidesz-KDNP	DK	Momentum	MSZP-P	Jobbik	MH	MKKP	LMP
ブダペスト	41.17	19.75	17.35	9.04	3.18	2.32	3.83	2.98
B-K	58.81	13.43	7.27	5.08	7.05	3.67	2.19	2.10
バラニャ	50.13	18.43	9.44	6.33	6.06	3.13	2.89	2.84
バーケーシュ	52.70	16.74	6.80	6.17	8.65	4.05	2.14	2.01
B-A-Z	51.65	15.77	5.79	7.15	11.69	4.02	1.82	1.52
チョングラード	49.32	13.89	9.47	11.53	5.38	4.95	2.99	2.07
フェイエール	53.83	16.01	9.15	5.31	7.03	3.69	2.58	1.98
Gy-M-S	59.17	13.74	8.44	4.90	5.79	3.26	2.28	2.07
H-B	57.37	14.16	7.98	5.54	7.14	3.17	2.21	1.95
ヘヴェシュ	52.63	16.12	7.14	5.82	10.26	3.95	1.88	1.74
J-N-Sz	53.44	14.95	6.00	6.53	9.60	5.28	1.93	1.58
K-E	50.08	19.65	8.56	7.34	5.59	3.50	2.61	2.22
ノーグラード	56.90	15.65	5.11	7.27	6.76	4.47	1.57	1.40
ペシュト	51.38	16.55	11.70	5.64	5.29	3.34	3.23	2.54
ショモジ	55.30	17.22	6.44	5.38	8.90	2.87	1.76	1.67
Sz-Sz-B	60.66	13.45	5.32	6.27	8.25	2.62	1.45	1.25
トルナ	59.02	14.40	6.63	5.98	6.11	3.53	2.01	1.88
ヴァシュ	61.03	13.03	7.42	5.63	6.43	2.40	2.01	1.76
ヴェスプレーム	54.75	15.20	8.22	5.96	7.53	3.50	2.39	2.06
ザラ	58.13	15.63	6.91	4.84	6.81	3.58	1.89	1.86

以下, 略記した政党名, Momentum: モメントゥム, MH: わが祖国, MKKP: 二尾の犬党

表10 欧州議会選挙（2014）首都、県別得票率（％）

	Fidesz-KDNP	Jobbik	MSZP	DK	Együtt-PM	LMP
ブダペスト	43.75	9.34	11.5	13.1	13.07	7.93
B-K	59.54	14.86	8.5	7.39	4.99	3.98
バラニャ	50.91	13.89	11.0	10.57	7.06	5.42
ベーケーシュ	52.43	17.08	11.55	8.54	4.52	3.79
B-A-Z	48.94	20.91	13.24	9.11	4.57	2.77
チョングラード	48.94	13.84	16.71	8.07	5.97	5.33
フェイエール	54.83	14.94	9.17	9.54	5.97	4.54
Gy-M-S	60.53	12.6	8.69	8.12	4.95	4.4
H-B	55.52	17.82	8.98	7.9	4.48	4.21
ヘヴェシュ	47.26	22.88	11.27	9.3	5.15	3.38
J-N-Sz	50.99	20.48	11.65	8.14	4.19	3.55
K-E	51.41	13.81	11.65	11.63	6.02	4.51
ノーグラード	51.15	17.91	12.69	9.52	4.43	2.94
ペシュト	52.62	14.64	8.41	9.95	7.88	5.56
ショモジ	54.7	15.36	10.37	9.61	5.37	3.74
Sz-Sz-B	56.63	16.71	14.66	5.86	3.16	2.16
トルナ	56.82	15.69	11.02	8.52	4.47	3.58
ヴァシュ	61.28	12.5	9.51	6.88	4.9	4.23
ヴェスプレーム	55.18	14.23	10.81	8.75	5.93	4.24
ザラ	55.38	17.09	9.11	8.5	5.41	3.7

以下、略記した政党名、Együtt-PM: 共に - 対話

2019年5月26日のハンガリーでの欧州議会選挙の投票率は、過去4回のうち最高の43.58%であった。前年の総選挙と同様、フィデスの優勢が伝えられていたにもかかわらず、多くの有権者が投票に足を運んだ。表8の選挙の結果のように、フィデスは52.56%の得票率で、ハンガリーに割り当てられた21議席のうちの過半数を越える13を獲得した。欧州議会選挙と総選挙とでは、有権者の関心の高さや選挙制度が異なるが、フィデスの比例区での得票率は前年の総選挙を上回っていた。同時に、欧州議会選挙では、前年の総選挙と異なる選挙結果がみられた。民主連合が得票率16.05%で第2党となり、4議席を得た。また、リベラル派の新党モメン

トゥムが得票率9.33%で2議席を獲得した。他方、社会党、ヨビックはそれぞれ6.61%、6.34%で1議席のみだった。環境保護派「政治のもう一つの可能性」は得票率5%を下回って1議席も獲得できなかった。

以下、フィデス、ヨビック、社会党の選挙結果を個別に分析する。

### フィデス

2018年の総選挙と同様の投票率の高さから、フィデスが争点とした不法移民の問題は、賛成、反対の立場を問わず有権者の関心を引いたといえる。第1章の問題提起①の答えとして、フィデスの不法移民の流入の脅威を訴えるポピュリスティックなキャンペーンは、前年の総選挙と同様、地方では一定の効果をあげた。

フィデスは前回2014年の欧州議会選挙と比較して、首都ブダペストでは43.75%（表10）から41.17%（表9）と得票率を減らした。首都を取り囲む人口の多いペシュト県でもフィデスの得票率は52.62%（表10）から51.38%（表9）に減少した。さらに、オーストリアに地理的に近いトランスダニューブ地域のフェイエール県、コマーロム-エステルゴム県、ジュール-モション-ショプロン県、ヴェスプレーム県でも、5年前よりフィデスは得票率を下げていた（表9、表10）。その背景として、民主連合、モメントゥムが支持を伸ばしたことが挙げられる。

しかし、その一方で、フィデスは同じ西部でも首都から遠い周辺部に位置するザラ県、ショモジ県、トルナ県で、それぞれ5年前より得票率を伸ばしていた（表9、表10）。さらに、首都より東に位置するノーグラード県、ヘヴェシュ県、ボルショド-アバウーイ-ゼムプレーン県、サボルチ-サトマール-ベレグ県、ハイドゥ-ビハル県、ヤース-ナジクン-ソルノク県でも、フィデスの得票率が5年前の欧州議会選挙より上回っていた（表9、表10）。フィデスが票を増やした地域では、後述するように、穏健化路線が党内の対立と分裂を引き起こしたヨビックが5年前よりも大



きく後退していた（表9，表10）。フィデスはヨビックの地方での支持層を取り込んだのである。いずれにしても，フィデスは2018年の総選挙と同様に，地方とくに首都から遠い周辺部の県での優位を維持している。

先述の2018年12月の労働法の改正に関して，一部の市民や野党の激しい反発にもかかわらず，残業時間の延長が欧州議会選挙におよぼした影響は小さかった。オルバーン政権の経済・社会政策は，失業率の高かった東部の県で支持されており，第1章の問題提起①の排外的な主張を掲げるポピュリズムとは一致せず，本来は左派・リベラル派の取り組むべき政策課題であった。

### ヨビック

2018年の総選挙の後，ヨビックでは党内の路線対立が起こり，党首ヴォナが辞任した。ヨビック内部の急進右派が離党して，新たな政党「わが祖国」を結成した。その結果，ヨビックは結成以来の急進右派からの支持を失ったばかりでなく，前回2014年の欧州議会選挙と比較しても全国的に有権者の信頼を失った（表9，表10）。ヨビックの穏健化と衰退の結果，第1章の問題提起②は成り立たなくなった。むしろ，フィデスが社会党を支持しなくなった東部の地方の有権者を完全に取り込んだのである。

「政治のもう一つの可能性」でも，2018年総選挙の後に党内対立で党首が交代した。2010年の総選挙以降，ヨビックと「政治のもう一つの可能性」は衰退著しかった社会党やかつての自由民主連合など従来の左派・リベラル派の支持層に食い込んで国会，欧州議会で議席を確保してきたが，党内対立を繰り返すことで有権者の失望を招くことになった。ヨビック，「政治のもう一つの可能性」に代わって，オリンピック招致の反対運動から政党になったモメントウムが支持を集めた。

### 社会党

欧州議会選挙の結果からも，社会党の低落傾向には依然として歯止めが

かかっていなかった。2014年の総選挙以降、ヨビックに侵食されてきた社会党の支持基盤は、2019年には民主連合やモメントゥムに侵食された（表9、表10）。小選挙区制度が導入されていない全国比例区のみである欧州議会選挙で、左派・リベラル派、ヨビック、「政治のもう一つの可能性」による野党同士の票の奪い合いともいえる状況が生じたのである。

旧体制下の支配政党であった社会主義労働者党内の改革派が1989年の秋に党名変更した社会党は、体制転換当時の民主化において中心的な役割を果たした。社会党は1990年の総選挙で大敗したが、まもなく実務能力を再評価されるようになった。社会党は1994年、2002年、2006年の総選挙で勝利して、ハンガリーの市場経済への移行、ヨーロッパ統合への参加を推進した。1989年の体制転換でソフトランディングを成功させた社会党に有権者が期待したのは、理念やイデオロギーなどの価値観でなく、様々な政策分野に精通した人材によるプラグマティックな統治であった。

ハンガリーの政治アナリストのファルカシュ（Farkas Örs）は「社会党は往年の同党自身の影なのだ<sup>(25)</sup>」と述べた。「影」とは求心力が失われて組織の弱体化が進行し、政党としての実態を失いつつある社会党の現状を描写した言葉である。社会党では地方組織の閉鎖が続いており、同党から選出された市長たちはすでに無所属か他党から2019年秋の統一地方選挙への立候補を意図している。確かに、ファルカシュが指摘したように、社会党の問題は2006年に始まっていた。2006年の総選挙から半年後、当時の首相ジュルチャーニの失言が原因で起こった首都での暴動で、社会党は多くの有権者の信頼を失った。その後、党勢が急速に衰退に向かった。だが、過去に遡れば、有権者の期待にもかかわらず、社会党は1994年から1998

(25) 2019年6月6日付『マジャル・ヒールラップ』（電子版）を参照。Magyar Hírlap, hu, 2019. június 6, <https://www.magyarhirlap.hu/belfold/20190606-farkas-ors-az-mszp-arnyeka-egykori-maganak>（2019年6月7日にアクセス）

年の政権で厳しい緊縮政策を実施した。その結果、社会党政権は本来の支持基盤である年金生活者や低所得者層の反発を招いていた。さらに、2010年の下野の後、社会党の内部で世代交代が進行して、旧体制下で台頭し体制転換後の国家再建を担ったテクノクラート等の人材が政治の表舞台から消えつつあった。実際に、2018年の総選挙の際と同様、社会党には、いわば選挙戦の顔となりうるリーダーが不在であった。第1章での問題提起③の答えを挙げるなら、フィデスの政権下での経済の回復や難民をめぐるEU内部の対立が続く政治状況の変化への無策と相俟って、社会党は30年かけて「体制転換の遺産」を食い尽くしたのである。

## おわりに

本稿では、2018年の総選挙、2019年の欧州議会選挙の結果から、ハンガリーの政党システムに生じている変化を論じてきた。総選挙と欧州議会選挙に関して、有権者の関心や選挙制度の違いはあるが、わずか1年の間に政党の勢力図に変化が生じたのは明白である。

2010年の総選挙で政権を奪還したフィデスは、2008年以降の危機を脱して回復基調にある経済、とくに雇用状況の改善を背景に地方の有権者の手堅い支持を得ている。同時に、フィデスは2015年の欧州難民危機以降に移民排斥を主張する西欧のポピュリストに類似した手法で不法移民の流入阻止を訴えて、二つの選挙で地方の不法移民の流入を警戒する地方の票の掘り起こすことにも成功した。

2018年、2019年の二つの選挙で勝利し国内基盤をさらに強固なものとしたオルバーン政権は、不法移民の流入阻止にとどまらず、同年秋の欧州委員会の人事等をはじめとして、EUの現状の変更を意図している。実際に、2019年10月に新たに就任する欧州委員会の委員長の人選をめぐって、オルバーンはヴィシエグラード・グループ（V4）の他の3カ国首脳と協

調して、これまで EPP 内部でフィデスと衝突してきたヴェーバー (Manfred Weber)、難民問題で対立してきた社会民主進歩同盟のティンマーマンス (Frans Timmermans) の選出に反対した<sup>(26)</sup>。V4 首脳の反対だけが理由ではないが、両者は欧州委員長に選出されなかった。

他方、2014年の総選挙以降に穏健化しはじめたヨビックは、2018年の総選挙では従来の社会党の支持基盤だった東北部のみならず、西部のトランスダニューブ地域でも支持を伸ばすことに成功した。しかしながら、ヨビックは路線変更によって生じた党内の分裂によって、1年後の2019年の欧州議会選挙では大きく後退した。ヨビックの国民政党への路線転換は同党のコアな支持者離れを引き起こしたばかりでなくのみならず、穏健な有権者へ十分に浸透しなかった。

社会党をはじめとする左派・リベラル派は、十分な選挙協力もままならないまま2018年総選挙を戦って大敗した。とくに、社会党は2010年代を通して地方での票田をフィデス、ヨビックに侵食されて、長期にわたる凋落傾向に歯止めがかからなかった。2019年の欧州議会選挙は、すべての野党の間で票の奪い合いともいえる状況となった。その結果、地方組織の弱体化が顕著な社会党にかわって、社会党から分裂した民主連合が議席を増やし、新しい政党モメントゥムが議席を得た。

現在のハンガリーの政党システムは、従来のヨビックの支持層である急進右派までウイングを伸ばしたフィデスの構造的一強ともいえる状態にある。他方、一連の選挙での敗北による混迷から脱していない野党は、未だ再編の途上にあるといえる。体制転換以来、民主化や市場経済への移行で

---

(26) 2019年6月29日付『マジャル・ヒールラップ』(電子版), *Magyar Hírlap*, 2019. június 29, <https://www.magyarhirlap.hu/kulfold/20190629-a-v4-ek-olyan-embert-akarnak-az-europai-bizottsag-elere-aki-erti-problemaikat> (2019年7月1日にアクセス)

役割を果たしてきた社会党が歴史的な使命を終えつつある中で、民主連合やモメントゥムを中心にフィデスへの対抗軸が形成される時によりやく政権交代が実現するのではないか。

論

説

The 2018 General Election and the 2019 European  
Parliament Election in Hungary :  
With Special Reference to Hungarian Party-System

Akira OGINO

The aim of this paper is to examine the characteristics of Hungarian party-system in the 2010s. Especially the author focuses on the General Election of 2018 and the European Parliament (EP) Election of 2019. He tries to analyze how Hungarian three parties, ruling party, Fidesz, right-wing party, Jobbik and the Hungarian Socialist Party have changed since 2010.

Fidesz succeeded in getting two thirds of seats of the National Assembly in 2018 and majority of seats of the EP in 2019. Jobbik leaders tried to change their political stance from far right to moderate after the General Election of 2014. Although they could gain seats of the National Assembly in 2018, they were defeated in the EP election of 2019.

On the other hand, the socialists, which grasped the power between 2002 and 2010, were severely defeated in the General Election of 2010. They could not put the brakes on the decline throughout the 2010s. The author thinks that their historical role comes to an end in the near future.

This paper consists of following sections :

1. Introduction
2. Hungarian Politics in the 2010s
3. The 2018 General Election
4. The 2019 European Parliament Election
5. Conclusion